

広く深く遠い生産

● 目先の商売、未来の商売

生ゴミを資源にしよう、学校給食に地元の農産物を届けよう！ と各地で提案してきたが、やっとここに至り「事業化」への動きが出てきた。生ゴミの資源化も学校給食への産直も、ビジネスとしての可能性が見えてきたからだ。

たとえば、福岡県椎田町^(注1)では地元の小学校の給食に循環米を提供しているが、これを地元にある自衛隊の基地や北九州市の学校給食に提供できないだろうか、と検討している^(注2)。

椎田の戦略はこうだ。

北九州市の人口はおよそ二〇〇万人。小中学生の数は八万人弱。学校給食の食材費の年間総計は三五億円、給食での米の消費量は七一〇tほど。給食の食材の購入先は北九州市が選べる。

一方、北九州市は毎年、焼却ゴミを五〇万t近く出している。その処理費用はおよそ二〇〇億円。焼却されたゴミは灰となって、最終処分地に埋め立てられるが、その最終処分地も残りわずかになっているのが各地の現状である。

焼却ゴミのなかで、およそ四〇%が生ゴミである。北九州市の場合は二〇万tである。

これを北九州市の市民が分別し、椎田町で肥料(液肥)として散布すれば、およそ水田一六〇〇ha分の肥料となる。

椎田町では化学肥料の使用を避けることができ、北九州市ではゴミの減量および処理費用が減少する。

そこで椎田町では、北九州市から一定の処理費用と生ゴミで栽培した米を学校給食に使ってもらうことで、都市と農村の循環を提案できないだろうか、と考えている^(注3)。

北九州市はエコタウン事業に積極的に取り組んでいて、さまざまな環境事業を全国に先駆けて行っている。それゆえ、椎田町が呼びかけて都市と農村の循環を実現すれば、ますますエコタウンとしての北九州市の評価は

表 大都市の焼却ゴミの量
(平成13年) (単位:t/年)

札幌	674,765
仙台	427,100
千葉	336,749
都区部	3,010,028
川崎	486,304
横浜	1,593,222
名古屋	716,337
京都	728,944
大阪	1,717,635
神戸	895,263
広島	339,393
北九州	495,519
福岡	684,580

出典:

<http://www.city.yokohama.jp/me/stat/>

高まるはずだ。椎田町の農業が元気になり、北九州市はゴミ処理費用が減るだけでなく、自らの名声も高まる。目先でも利益が上がり、未来をつくっていく仕事になる。

● 循環は行政の役割

こうした事業の可能性は椎田町ばかりではない。大都市ではゴミがたくさん出て（前ページ表）、その処理費用に頭を抱えている。都市がモノの豊かさを追求してきた結果が、これである。大阪市では八〇〇億円、広島市では一三〇億円ものゴミ処理費用が使われている。都市はどれもゴミ処理費用の大きさ、最終処分地の確保に頭を抱えている。

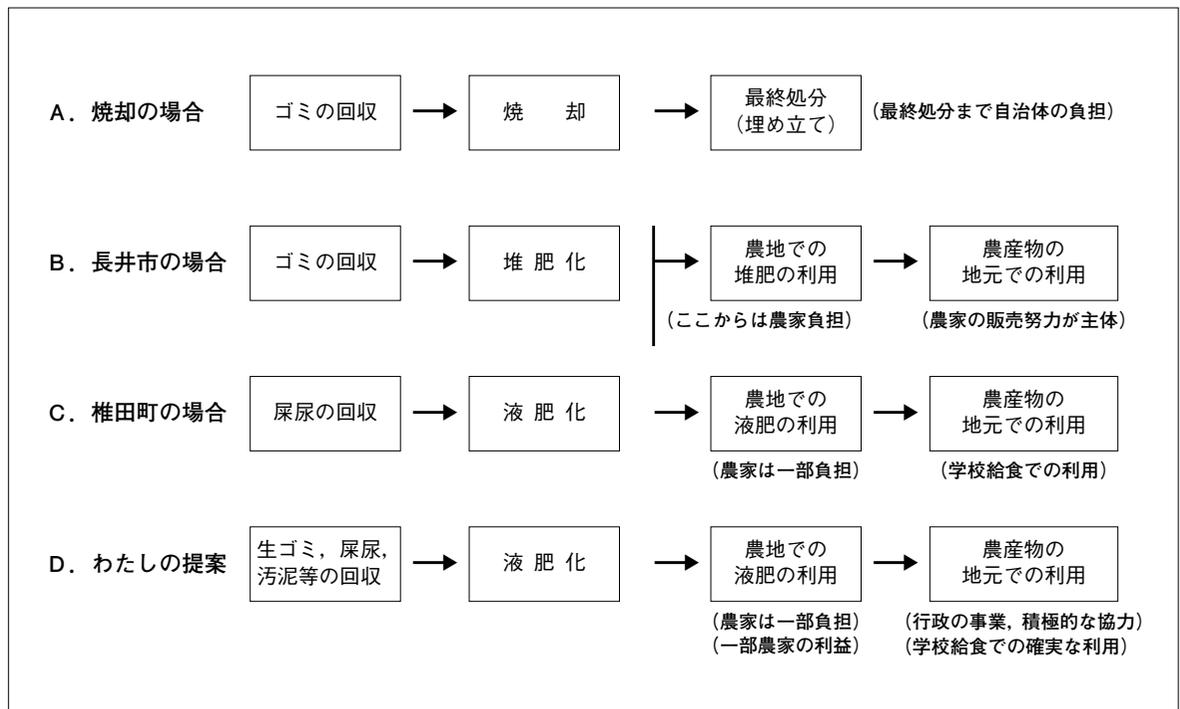
そこで、農村が主体的に動けば、都市と農村の循環事業は、確実に積み上げられる仕事である。

生ゴミを液肥で散布するノウハウと都市の学校給食に販売するノウハウがあれば、各地で都市と農村の循環事業をつくることができる。ゴミ処理に窮している都市を救うことができるのは、農村の側の主體的な循環戦略である。一方で、ぼんやりしていると、農村は都市のゴミ捨て場になってしまう。ゴミ捨て場とは、ゴミとゴミ処理の苦勞が押しつけられるという意味である。

山形県長井市で行われているレインボープランでは、同推進委員会の委員長、菅野芳秀さんをはじめ地元の家が積極的に活躍している。全国からの視察も多い。

菅野さんのすばらしい話を聞き、本を読み、感激して長井市に視察に行ったのだが、違和感が残ってしまった。

図 ゴミ処理も循環も自治体負担



「なぜ、農家だけが、あそこまで苦勞を背負わないといけないのか」と。

日本では、ゴミ処理は自治体の責任で行われている。つまり、税金が使われている。税金でゴミが回収され、焼却され、灰は最終処分地に埋め立てられている(図A(前ページ、以下同))。

ところが、長井市ではゴミの回収と堆肥化は税金で行われるが、その堆肥を利用し、農産物を販売するのは農家の負担である。長井市はよその自治体よりも積極的に動いているが、主体は農家である。長井市で生ゴミが資源として循環しているのは、菅野さんをはじめ農家の「努力」によるもの大きい。

これは長井市だけでなく、生ゴミを肥料化しているほとんどの自治体の傾向である。バイオマスニツポンとという日本政府の政策でも同様である(図B)。

肥料が不足していた江戸時代だからこそ、農民は尿(しにょう)を肥料として都市から購入していた。しかし、いまでは輸入肥料が安価に入手できる時代である。

都市住民が安い輸入農産物を購入したそのゴミをなぜ、日本の農家が苦勞して堆肥(たいひ)として利用しなければならぬのか。

堆肥を使うな、土づくりをするなということではない。本来、行政の仕事をなぜ、農家が無償で引き受ける必要があるのか、ということである。

長井市で感じた違和感は、これであった。

農家の無償の努力、無理をとまなう循環であったからこそ、長井市への視察は多くても、各地で実現すること

はなかった。

椎田町の場合(図C)は、町が液肥を格安で散布し、その米を給食に利用することで農家が利益を得ていた。それゆえ、液肥の利用は歓迎された。

行政が肥料散布、農産物の一部購入まで行うことは、一見、税金のむだ遣い、農家への過剰な保護と思われるかもしれないが、ゴミ処理は行政の仕事である。さらには、循環型社会を確実につくり上げるだけでなく、焼却処分よりも循環のほうが、よほど税金の支出が少ない方法である。

循環のどこかでだれかが「がんばる」ことで、循環はむしろ途切れていた。だれもががんばらずに、だれもが利益を受けることで、循環はスムーズに回っていく。椎田町では、税金から給料をもらっている公務員が、液肥の散布までやることで、循環型社会が建設され、町全体としてゴミの量と税金の支出は少なくなっていた。

こうした椎田町の方法に学んで、わたしは図Dの流れを各地の自治体でつくっていく準備をしている。

● ビジョンをつくれれば動きだす！

自治体で循環の動きをつくるには、まず「ビジョン」をつくる必要がある。基礎調査をふまえて、液肥の散布をだれが、いくらでやるのか、その農産物の購入をだれが担当者としてやるのかという「実行計画」「事業計画」がビジョンである。そして、それがどれくらいの費用がかかり、どれくらいの効果があるのかまで計算して、議



写真1 わたしの名刺で使っている写真です。あせ道に咲いている小さな草花が好きです。

会に提案する。議会はその「費用対効果」を検討し、地域が豊かになるならその事業に税金を使いましょう、という判断をする。そして、やっと動きだす。

循環型社会とは、行政の新しい動き方の提案でもある。循環型社会や地場産給食のテーマで講演会に呼ばれることが多いが、けっして動きにはつながらない。

地場産給食では、ここ数年で一〇〇か所近く講演を行ったが、どこも「話だけ」で終わっている。

長崎県大村市では基礎調査をきちんと行ったが、ビジョンをつくらなかったため、盛り上がったシンポジウムだけで終わった。行政の担当者のだれが責任をもってやるのか、予算はいくらかまで決めていなかったためである。それゆえ、給食への地場産の導入はないままだ。

福岡県大木町でも四年間の基礎調査、生ゴミ分別の実証までやったのに、「循環型社会建設に使う予算はない」という新しい町長の考えで、頓挫^{とんざ}してしまった。

一方、椎田町では今年度、「新エネルギービジョン」というNEDO（新エネルギー・産業技術開発機構）の予算を使って、循環型社会建設のための基礎調査とビジョンづくりを行った。来年度はFS調査（事業実現のための予備調査）で事業可能性を追求する。こうした調査をふまえて、町は学校給食や循環事業に予算を出し、あらたな動きをつくり出そうとしている。

消火剤のリサイクル、北九州市との生ゴミ―農産物循環事業などを本格的な事業として、数年後には形にしていく予定である。これらはよその農村でも可能である。

椎田町では液肥の利用、農産物の給食等への産直、循

環授業などがきちんと予算化され、担当者（産業課）も決まっている。それゆえ、行政の仕事として循環事業が積み上げられている。

● 広く深く遠い生産

経済社会ではお金がないとやっていけない。だから、必死に目先のお金を求めて働いてきた。

生活がかかっているから目先で利益を得ようとする。そうした働き方の結果、農地を荒らし、農村がすたれていく。そして、農作業によって生かされていた多くの生き物たちを失ってきた。

「メダカもトンボも、田んぼや農作業が生みだしてきた」と宇根豊さんは言う。

宇根さんは公務員の仕事を辞めて、NPO法人「農と自然の研究所」を主宰している。

農業をむやみに使わず、田んぼの虫や動物や植物を気にした農作業をすることで、田んぼからは多くの花や生き物が生まれてくる。田んぼは米を作るだけのところではない。都市のために水を蓄えるダムだけでもない。

目先のお金を生み出すだけではない、こうした農業のあり方を「広く深く遠い生産」と宇根さんは呼んでいる。「広く深く遠い生産」は、現場で悩み、現場で考えてきた人から生まれた言葉なのだと思う。

これから数年で、椎田町の循環事業は「広く深く遠い生産」として、お金を得るような仕組みを獲得していく。多くのJA、農村が、これに続いてほしい。

参考：

- 宇根豊さんのHP
<http://hb7.seikyou.ne.jp/home/N-une/>
- NPO地域循環研究所のHP
<http://www.junkan.org/>

感想や意見は、下記まで。

osamu.nakamura@nifty.ne.jp
<http://homepage3.nifty.com/osamu-nakamura/index.htm>